様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　８ 日現在

機関番号：１１１０１
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ１４４５７

研究課題名（和文）R-PASを用いた減弱精神病症候群（APS）の病態の解明

研究課題名（英文）Personality functioning of Attenuated Psychosis Syndrome (APS) evaluated by R-PAS

研究代表者
井上　直美（Naomi, Inoue）

弘前大学・保健学研究科・教授

研究者番号：５０８１５９１７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：日本の早期精神病治療ガイドラインでは，軽度から中等度の減弱型精神病症候群（APS）患者に対して認知行動療法をベースとした包括的な心理社会的介入を推奨している。しかしなら，APS患者の併存症や主訴は多岐にわたっており，治療目標や介入順序を決定することは困難である。そこで，行動に基づくパーソナリティ検査であるR-PASを用いて，APS患者のパーソナリティ機能に関する解明を試みた。結果から，APS患者は健常群に比べて有意に対人機能が低いことが明らかになった。日本人のAPS患者に対する心理社会的支援は，特に対人関係スキルに焦点を当てることが推奨される。

研究成果の学術的意義や社会的意義
減弱型精神病症候群（APS）患者に対する過去10年間の研究は，精神医学分野の主導により，精神病発症への移行マーカーを見出すことに力が注がれてきた。しかし，近年では精神病への移行の有無に関わらず，メンタルヘルスの不調サインに早期介入することによって問題の重篤化を防ぐ予防的な支援にシフトしてきている。
本研究では，これまでAPSについての研究がほとんど実施されてこなかった臨床心理学的観点から，パーソナリティ機能を評価するR-PASを初めて用いたことにより，APSに対する心理社会的支援に関して具体的な提唱を行ったことは意義深い。

研究成果の概要（英文）：Japanese guidelines for the treatment of early psychosis recommend a comprehensive psychosocial intervention based on cognitive-behavioral therapy for patients with mild to moderate Attenuated Psychosis Syndrome (APS). However, the comorbidities and chief complaints of patients with APS are diverse, making it difficult to determine treatment goals and intervention order. Therefore, we attempted to elucidate the personality function of APS patients using the R-PAS, a performance-based personality test. The results revealed that APS patients have significantly lower interpersonal functioning than the healthy conotrol. This results recommend that psychosocial support for APS patients focus on the acquisition of interpersonal skills.

研究分野：臨床心理学

キーワード：減弱型精神病症候群（APS）　R-PAS　パーソナリティ機能　対人機能　対人認知　対人スキル

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

減弱型精神病症候群（Attenuated Psychotic Symptoms: APS）とは，DSM-5（アメリカ精神医学会，2013）において，一般臨床での診断信頼性の検証が不十分であり，適切な治療的介入に関する知見が乏しい等の理由により（根本ら，2020），正式診断名としてではなく第 III 部の「今後の研究のための病態」に収載された概念である。症状として①妄想，②幻覚，③まとまりのない発語の３つがあり，いずれも精神病性障害の閾値には達しない「微弱」な症状であることが基準となる。

APS に関する初期の研究においては，早期の APS 診断のためのツールの開発や，精神病発症に至る生物的マーカーを明らかにすることに重点が置かれてきた。しかし，その後の研究の蓄積により，APS から本格的な精神病へと移行する者は 3 年間で 30%程度であることや（Fusar-Poli et al., 2012），発症に至らなかったとしても他の精神疾患へ移行する場合や，社会機能が低いままにとどまる場合が多いことが明らかにされてきた。これらのことから，APS の診断がつくかつかないか，また，精神病へと移行するかしないかに関わらず，援助を求めてきた者すべての患者に対して重症化を防ぐための早期介入の必要性が認識されるようになってきている。

日本における APS を含む早期精神病の「予備的ガイダンス」（水野ら，2017）においては，軽度から中等度の APS 患者に対して認知行動療法をベースとした包括的な心理社会的介入を推奨している。しかしながら， APS 患者の併存症や主訴は多岐にわたっており，APS 同定のためのサイコーシス・リスク評価スケール Structured Interview for Psychosis-Risk Syndromes / Scale of Psychosis-Risk Syndromes; SIPS / SOPS）のみでは，個々の患者の治療目標や介入順序を決定することは困難である。

２．研究の目的

APS 患者に対する最適な心理社会的支援の治療計画に資するべく，行動に基づくパーソナリティ検査である Rorschach Performance Assessment System (R-PAS) を用いて，APS 患者のパーソナリティ機能について解明を試みた。

我々が過去に実施した APS に対する認知行動療法の実施可能性を探る研究より，APS を呈する患者は健常群に比べて対人機能が低いことが予測された。

３．研究の方法

(1) APS の対人機能に関する探索的研究

都心部にある A 病院において研究期間中の最初の 2 年間において APS と診断された患者（SIPS/SOPS の評価により，B 基準の微弱な陽性症状を満たす者），および，健常ボランティアの研究協力者を募り，協力者全員に対して R-PAS を含むテスト・バッテリーを実施した。R-PAS の結果として算出される変数のうち，仮説に基づき，特に「自己と他者に関する表象」のドメインに含まれる変数に着目して，両群の標準得点の差を t 検定により比較した。

(2) 地方都市における APS 患者に関する研究

研究期間を延長した最終年に，地方都市にある B クリニックにおいて，SIPS/SOPS の評価トレーニングを行った精神科医が，APS の可能性の有る者を電子カルテより選出し，診断を見直した。また，カルテから受診のきっかけとなった主訴について調査した。

以上，全ての研究は，研究代表者の所属機関，および必要な場合には，研究協力機関の倫理委員会の許可を得て実施した。

４．研究成果

(1) 研究初年度に倫理委員会の承認が得られた直後に新型コロナウィルスの流行となったことや，研究協力機関の統括責任者の交代により，A 病院における新たな APS 患者の受診者が 0 名となったため，過去に APS 患者から取得したロールシャッハ・テストのデータを，R-PAS にコーディングし直して分析をする措置を取った。これにより，R-PAS の実施法によって新たにデータを取得したのは APS 群 3 名，健常群 9 名となり，R-PAS にコーディングし直した過去のデータ 31 名と合わせて，合計 34 名の R-PAS データと健常群 9 名のデータとを比較した。

研究機関の規定により，健常ボランティアの対象年齢を 20 歳以上とせざるを得なかったことから，両群の平均年齢は APS 群が 18.6 歳（SD = 4.9），HV 群が 25.3 歳（SD = 2.6 歳）と有意な差が生じた。R-PAS の結果の比較から，APS 患者は健常群に比べて有意に対人知覚に関わる変数 PHR/GPHR （貧質人間表象反応の全人間表象反応に対する割合）のスコアが高く，対人機能が低いことが示唆された。更に，援助欲求を示すとされる変数 ODL についても，APS 群の方が健常群よりも有意に高く，困り感を抱えていることが明らかになった。

(2) 地方都市の B クリニックにおいては，APS 疑いの患者 167 名のうち，SIPS/SOPS により APS の診断のついた者が 9 名いた。そのうち，高校生は 2 名であり，他の 7 名は中学生であった。受診のきっかけとなった主訴は，家族メンバーとのトラブルが 2 名であり，他の全ての者は

学校における友人とのトラブルや，友人からの視線に対する恐怖を訴えていた。また，APS に変更する前の診断名は，7 名が適応障害であり，残りの 2 名はそれぞれ不安障害，抑うつ状態であった。これらのことから，APS は中学生ぐらいの世代において，学校における友人とのトラブルを契機に症状が顕在化し，援助を求めて来院することが多いことが示唆された。

本研究にはいくつかの限界がある。第一に，R-PAS の実施法で取得したデータが少なく，過去に異なるシステムによって取得したデータを変換して用いたことである。さらに，APS 群と健常群との年齢差が存在したことである。本研究において検討した変数に関しては，2 群間に大きな差が見い出され，同年齢群の国際規範データと比較しても，APS 群の対人機能は有意に低かったことから，これらの影響は少なかったものと考えられるが，今後は APS 群と健常群との年齢をマッチングさせて比較すべきであろう。

以上のような限界はあるものの，日本人の APS に対する心理社会的介入においては，特に若年患者の対人スキルの獲得に焦点を当てた支援が望まれることが明らかになったと言える。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>白木由香，井上直美 | ４．巻<br>16 |
| ２．論文標題<br>シンガポールの医療福祉政策と早期介入にあたる医療機関の経営評価：バランス・スコアカードを用いた試み | ５．発行年<br>2022年 |
| ３．雑誌名<br>東海学院大学紀要 | ６．最初と最後の頁<br>111-116 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.24478/00003834 | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>Naomi Inoue | ４．巻<br>34 |
| ２．論文標題<br>Rorschach competencies expected at the completion of a master's degree program in clinical psychology in Japan: An analysis of certification examinations in the last 10 years | ５．発行年<br>2023年 |
| ３．雑誌名<br>Journal of Teikyo Heisei University | ６．最初と最後の頁<br>1-8 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>井上直美，水野雅文 | ４．巻<br>63 |
| ２．論文標題<br>包括システムからR-PASへ：ロールシャッハ・テストの新体系の普及に向けて | ５．発行年<br>2021年 |
| ３．雑誌名<br>精神医学 | ６．最初と最後の頁<br>1001-1012 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.11477/mf.1405206393 | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　1件／うち国際学会　3件）

| |
|---|
| １．発表者名<br>井上直美 |
| ２．発表標題<br>R-PASの概要と課題―包括システムのreplacementとして― |
| ３．学会等名<br>日本ロールシャッハ学会（招待講演） |
| ４．発表年<br>2023年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Naomi Inoue, Tomoko Kato |
| ２．発表標題<br>Prevalence of DSM-5 APS at a community-based mental clinic in Japan |
| ３．学会等名<br>14th International Conference on Early Intervention in Mental Health（国際学会） |
| ４．発表年<br>2023年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Naomi Inoue, Hiromi Tagata, Tomoyuki Funatogawa, Takahiro Nemoto |
| ２．発表標題<br>Comparison between patients with Attenuated Psychosis Syndrome and healthy controls in terms of interpersonal functioning |
| ３．学会等名<br>XXIII Congress of the International Society for the Rorschach and Projective Methods（国際学会） |
| ４．発表年<br>2022年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>井上直美 |
| ２．発表標題<br>認知行動療法モデルに基づいたRorschach Performance Assessment System(R-PAS)の結果フィードバック用ワークシートの開発 |
| ３．学会等名<br>第22回日本認知療法・認知行動療法学会 |
| ４．発表年<br>2022年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Naomi Inoue |
| ２．発表標題<br>The effect of R-PAS with or without physical distance: A case study of a healthy volunteer participant in a longitudinal study |
| ３．学会等名<br>2021 SPA (Society for Personality Assessment) Virtual Convention（国際学会） |
| ４．発表年<br>2021年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>井上　直美，田形　弘実，船渡川　智之，辻野　尚久，根本　隆洋，水野　雅文 |
| ２．発表標題<br>R-PASによる減弱精神病症候群（APS）のアセスメント：潜在的な利点の検討 |
| ３．学会等名<br>第23回日本精神保健・予防学会学術集会 |
| ４．発表年<br>2019年 |

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

| |
|---|
| https://r-pas.org/より，以下のR-PASに関する教材を翻訳・監修<br>「R-PAS実施チェックリスト」<br>「R-PAS初回実施チェックリスト」<br>「児童を対象としたR-PAS実施ガイドライン」<br>「形態水準のコーディングにおける適合性の判断の手引」<br>「解釈ガイド」 |

６．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|
| 研究協力者 | 根本　隆洋<br>(Nemoto Takahiro) | | |
| 研究協力者 | 舩渡川　智之<br>(Funatogawa Tomoyuki) | | |
| 研究協力者 | 田形　弘実<br>(Tagata Hiromi) | | |

６．研究組織（つづき）

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|
| 研究協力者 | 水野　雅文<br><br>(Mizuno Masafumi) | | |
| 研究協力者 | 八ツ賀　千穂<br><br>(Yatsuga Chiho) | | |
| 研究協力者 | 加藤　知子<br><br>(Kato Tomoko) | | |

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 | | | |
|---|---|---|---|---|
| イタリア | University of Turin | | | |
| 米国 | Alliant International University | University of California Los Angeles | R-PAS, LLC. | |